

琉球大学学術リポジトリ

琉歌＜旅歌＞の諸相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, Junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9968

琉歌〈旅歌〉の諸相

前 城 淳 子

はじめに

『琉球国由来記』には、首里城玉庭に中国へ渡航する人々を招いて「渡唐衆御茶飯」の儀礼が行われたことが記されている。それによると「御茶飯」の儀礼の中で綱作りが行われる中「御唄」が歌われること、料理やお酒が振る舞われること、国王が正殿の正面に出御して姿を見せること、その際に玉庭で旗を振りながら「旅歌」が歌われること、国王へ謝礼を述べ、首里城を下がる際にも「旅歌」が歌われることがわかる。『琉球国由来記』に「旅歌」の歌詞は記されていないが、山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』（一九六四年）には、首里城での饗宴が終わり退出する際に歌われた「旅御前風節」、家族縁者によつてクエーナとともに歌われた「旅歌」の歌詞が記されている。これによると「旅歌」は八八八六の琉歌の詩形を持つ歌であることが分かる。首里城で行われる「渡唐衆御茶飯」の儀礼、渡唐衆の家庭で旅人の安全を祈願して行われる儀礼の中で、琉歌が歌われていたのである。^二

『歌道要法琉歌集』^三や『山城正樂本琉歌集』^四などの節組琉歌集には、「かぎやで風節」に統いて「旅之時」として理想的な旅を描いた歌、旅の安全を願う歌が収録されている。^六かぎやで風節は祝宴で演奏される曲であり、御代や豊作、長寿などさまざまな祝いが歌われる。これらの祝いの歌と分けて「旅之時」としてまとめられたのは、旅の儀礼が重要なものであつたことを示しているのではないだろうか。テーマによつて琉歌を分類配置した『南苑

八景』は、旅中のつらさや故郷を離れたさびしさを詠んだ「羈旅」とは別に、旅の安全を願う歌を「旅歌」としてまとめている。^七 部立としても「羈旅」と「旅歌」とは区別されている。

本稿は、『歌道要法琉歌集』（以下「歌道要法」）、『琉球俗謡集』、『若樹文庫旧藏本琉歌集^八』（以下「若樹本」）、『沖縄声曲集^九』、『山城正楽本琉歌集』（以下「正楽本」）、『南苑八景』に収録されている琉歌、山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』（以下「古謡秘曲の研究」）、見里春『踊合』（文唱堂 一九七六年）、さらに『南島歌謡大成II 沖縄篇下』（角川書店 一九八〇年）に収録されている琉歌の中から、「旅歌」を抽出し、その諸相を明らかにすることを目的とする。「旅歌」と「羈旅」に描かれている内容は近接していく区別することが難しい場合がある。両者はまとめて扱う必要があると思われるが、「羈旅」は次の課題としたい。

「旅歌」に描かれている旅は、船による旅である。旅は、出発から目的地に向けての航行、目的地への到着、滞在、帰郷へ向けての航行、そして帰着と、一連のでき¹⁰ことを辿る。だが、短詩形である琉歌はこの一連のでき¹⁰とを時間の推移にそつて描くことはしない。旅の中の、ある一つの場面や局面を取り出して描いている。そのため、「旅歌」は、旅の出発の場面、航行中の場面、旅の目的地へ到着した場面、旅人が旅先に滞在中の場面、旅先から故郷へ帰着する場面のように、旅のどの場面を描いているかによって分けることができる。

また、「旅歌」には旅の無事を願つて儀礼を行うことや、船や旅人など旅に関わるものと讃美するなど、旅の全般に関わることを描いているものがある。

旅のどの場面が描かれているかによって、出発、航行、到着、滞在、帰着に分け、旅の全般に関わる歌を旅の祝いとし、それぞれの主題の体系を示すと次のようになる。

第一章 出発

(1) 順風が吹く

(2) 船足が速い

(3) 帆柱に到着を願う

(4) 国王拝謁

(5) 無事を願う

(6) 手紙をください

(7) 帰りを願う

(8) 帰りを待つ

第二章 航行

(1) 順風が吹いている

(2) 平穏な航行

(3) 虎の走り

(4) 船の走るさまが美しい

(5) 神による守護

(6) 海上の平穏を願う

(7) 明日到着する

第三章 到着

(1) 目的地に早く着いた

(2) 目的地が近い

(3) 到着した様子が見えるようだ

第四章 滞在

(1) 吉報を伝えて欲しい

(2) 帰りを待つ

(3) 無事を願う

(4) 手紙を受け取る

(5) 公務の遂行

(6) 旅人の花

第五章 帰着

- (1) 那覇の港に入る (2) 通堂を通る
(3) 那覇の港に早く着いた (4) 帰りを喜ぶ

- 第六章 旅の祝い
(1) 嘉例吉の遊び (2) 讀美
(3) 家族を慰める

以下、この分類にそつて、琉歌の〈旅歌〉に描かれた〈ことがら〉〈ことこう〉をみていくたい。

第一章 出 発

出発の場面は、船の纜を取る、碇を乗せ帆をあげる、出帆のかけ声をかける、帆柱を立てる、のように出帆にともなう動作を示したり、船が潮に浮く、のように、出帆が近い船の状態を描くことで表される。また、御祝日（船の出帆祝いの日）になる、明日は出船だ、のように出発の日が近いことを示したり、三重城で手拭いを持ち上げる、三重城で扇を招く、のよう見送りのさまを描くことで出発の場面であることが示される。

出発の場面は、(1)出発に相応しい順風が吹いている、(2)船足の速い船だ、のように出発の場面での理想的な状態を描いたもの、(3)帆柱に目的地への到着を願う、(4)国王を拝謁したい、(5)無事を願おう、(6)手紙をください、(7)帰りを願う、のように、旅に関わる人々の願いをそのまま表現したものがある。(3)と(4)は旅人の立場で、(5)から(7)は

旅に出る人を見送る者の立場で、出発に際しての〈いゝやう〉が述べられる。

(1) 順風が吹く

帆船での航行には順風であることが重要である。風は真艤からだ、と理想的な状態がすでに実現しているように表現される。航行の際にも順風であることが歌われるが（第二章「(1)順風が吹いている」の項参照）、航海が始まる出発の時点で順風であることは、その後の航海も順風であることを期待させ、重視されただろう。

「良い時を選んだので船の纜を取ると風は真艤からだ」「碇を乗せ帆をあげ出発のかけ声をかけると風は真艤からだ」「お祝いの日になると順風でめでたい旅の徵だ」と出帆の際に順風が吹いている理想的な状態が描かれる。

たんちゅかれよしや撰て差し召る 御船の綱取れは風や真艤 （琉歌百控・83）

〔誠に縁起の良い旅は相応しい時を選んでお出かけになる。船の纜を解けば風は真艤からだ。〕

いかい引乗て本帆矢帆もたち いまゐのかげうたひは風やまとも （南苑八景・691）

〔碇を引き乗せて本帆と弥帆を靡かせて「いまいの楫」を歌えば風は真艤からだ。〕

本帆矢帆持ひ今意の楫おたへは 波路穩に風やまとも （若樹本・37）

〔本帆と弥帆を靡かせて「いまいの楫」を歌えば波路が穩やかで風は真艤からだ。〕

次の歌では御祝日になつたら順風だと歌う。『琉歌全集』はこの「御祝日」を「船の出帆祝い日」としている。

出帆に際して順風が吹くことが、その後の航海が無事である」との証しとなるのである。

御祝日になればおす風もまとも たんちよかれよしのしるしさらめ (歌道要法・28)

〔お祝いの日になれば吹く風も真鱸から吹いて、誠に縁起のよい旅の徵だ。〕

(2) 船足が速い

出帆する船が順風を受けて速く走ることは理想的な船出であろう。「順風が吹いて虎のようく速い走りだ」「虎に羽をつけて飛ぶよりも速く走る船だ」「船足の速い船は一日しか見えない」と船足が速いさまが描かれる。

虎は一日に千里を往来するということから、船足の速さを「虎のはしり」「虎に羽をつけて飛ぶよりも速く」と表現している。「船の纜を取れば順風が吹き、出帆のかけ声をかければ虎のように速く船が走る」と、出帆の時に順風が吹き、さらに船足が速いことが歌われている。

お船の綱とれば真鱸吹き送て いまゐの梶歌へば虎のはしり (琉歌全集・1638)

〔船の纜を解ぐと風は真鱸からの風を吹き送つていまいの梶を歌えば虎のよくな走りだ。〕

次の歌は「速く走る虎に羽をつけて飛ぶよりも速く走る船だ」と船足の速いさまが描かれる。船が「雲に走入る」というのは、港で見送る者の視点から描かれているからであろう。

虎に羽つけて飛よりも早く　雲に走入いる按司の御船　（南苑八景・718）

「虎に羽を付けて飛ぶよりも速く雲に走り入る按司のお船だ。」

次の歌は「三重城にのほて」と出発する船を見送る場面であることが示される。そして「はやふねのならひや一目とみゆる」と出港する船が速く走つていくさまが描かれている。

三重城にのほて手巾もちあければ　ゝやふねのならひや一目とみゆる　（古今疏歌集・1173）

〔三重城に登つて手拭いを持ち上げると、船足の速い船の習いで、一目しか見えない。〕

この「三重城にのほて」の歌は雑踊り「花風」の歌詞として広く知られているものである。踊りでは、遊女が三重城で航海安全を祈りながら恋人を見送る風情を表現し、後半の述懐ぶしで「朝夕さもお側拌みなれそめて　里や旅しめていきやす待ちゆが」の歌詞で離別の辛さが表現される。そのため「一目とみゆる」を別れの辛さのために一目しか見えなかつたと解釈されることがあるが、本来は船足が速い船を描いて航行が順調であることを願う歌であつただろう。『踊合』には「三重城に登ばて手拭むちやげれば　走り船のなれば走るが美らさ」（24番）の歌詞が収録されている。

(3) 帆柱に到着を願う

帆船にとって帆柱は大切なものである。出発地で立てた帆柱が倒されることはなく、そのまま目的地に着くことは、

順調な航海を表す。

次の歌では「那覇の港で立てた柱、大和山川に引いて走ろう」と出発地である「那覇の親泊」で帆柱を立て、目的地「大和山川」に向かうことが描かれている。

那覇の親泊押立る柱 大和山川に引よ柱 （琉歌百控・374）

〔那覇の立派な港で押し立てる帆柱よ、大和山川に引いてくれよ、帆柱よ。〕

四句目「引よ柱」を『琉歌全集』(55番)では「ひけよはしら」と表記している。しかし、その他の歌集では「ひちゅ」(『歌道要法』23番)、「ひちよ」(『大島筆記』23番)と表記されており、連用形「ひち^上(引き)」の形である。「引よ柱」は「引いてよ、帆柱よ」と帆柱に無事に目的地まで船を引いてほしいという〈こころ〉を歌つたものであろう。

この歌の類歌は三句目の「大和山川」を「唐土親泊」「唐土木のした」「かたひらの城」「薩摩山川」に入れかえた形になっている。旅がどこを目標していたかによって歌い分けられていたのだろう。次の歌では目指す場所を「唐土親泊(唐の立派な港)」としている。

那覇の親泊押立るはしら 唐土親泊ひちよゝはしら (南苑八景・696)

〔那覇の立派な港で押し立てる帆柱よ、唐の立派な港に引いてくれよ、帆柱よ。〕

次の例では目的地を示す部分に「唐土木のした」と「大和山川」が併記されている。「大和山川」は薩摩の山川のことであり、琉球との交易の拠点となつた場所である。「木のした」は「虎の門（五虎門）」から福州琉球館に向けて行つた停泊地を指すものと思われる。王冬艶「清代琉球進貢船派遣に関する研究－常例進貢を中心」によると、木之下という地名が『家譜史料』にみられ、所在地は不明であるが、「木之下」が内港停泊地であることは間違いない^{〔注〕}としている。琉歌に「虎の門や日付 木の下までも（虎の門はその日のうちに着いて木の下までも）」（『琉球大歌集』³⁶⁷番）とあることからも、木之下が五虎門から福州琉球館にいたるまでの停泊地の一つであつたことは間違いないであろう。

那覇の親泊おしたてるはしら 唐土木のしたにひちゅはしら
大和山川にひちゅはしら（歌道要法・23）

〔那覇の立派な港で押し立てる帆柱よ。唐の木の下に引いてくれよ、帆柱よ。／大和の山川に引いてくれよ、帆柱よ。〕

次の歌の「かたひらの城」を『琉歌全集』は「薩摩の山川港であろうか」としている。『琉球俗謡集』（24番）は下句「かたひらの城ひちゅゝはしら」に「大和山河にひちゅゝはしら」を並べて記している。」のようく歌詞が並記されているものに、「唐土木のした」と「大和山川」（『歌道要法』23番）、「虎の門口」と「山川みなと」（『歌道要法』24番）、「唐土」と「大和」（『歌道要法』25番）、「美崎」と「慶良間」（『琉球俗謡集』32番）がある。「美崎」と「慶良間」の場合は航路の違いによるもので、これ以外は唐（中国）と大和（日本）の地名が並記されている。

目的地や航路によつて地名を入れ替えて歌われたものである。とすると「かたひらの城」は山川ではなく、唐（中國）の地名とも考えられる。

那霸の親泊ナハノシタタマおしたてるはしら かたひらの城ひちゅよはしら (古今琉歌集・1096)

〔那霸の立派な港で押し立てる帆柱よ、かたひらの城に引いてくれよ、帆柱よ。〕

次の二首は『大島筆記オシマノヒガキ

¹¹⁸』に収録されている歌である。『琉歌百控』(374番)、『歌道要法』(23番)、『琉歌全集』(552番) では三句目が「大和山川」となつてゐるが、『大島筆記』に収録された歌はいずれも「薩摩山川」となつてゐる。

那霸のおや泊りおし立てるはしら 薩摩山川にひちよはしら (大島筆記・23)

〔那霸の立派な港で押し立てる帆柱よ、薩摩の山川に引いてくれよ、帆柱よ。〕

大島の泊りおし立てるはしら さつま山川にひちよはしら (大島筆記・47)

〔大島の港で押し立てる帆柱よ、薩摩の山川に引いてくれよ、帆柱よ。〕

「大島の泊り」の歌は「大島にて作りうたひし歌」の中の一首で、左註に「八月のはしめ三四輩はしめて船よりあかり大島の洞仙寺に遊び船へ帰るさに祝ひうたひし也」と記されている。前歌の「那霸の親泊」の部分を「大島の泊り」に入れ替えたものであり、大島から目的地である薩摩山川へと無事に着くことを祝つて歌われたものである。

(4) 国王拝謁

公務のため唐へ渡る際に首里城で国王臨席のもと儀礼が行われたことは、『琉球国由来記』の「渡唐衆御茶飯」の記事からも分かるが、旅の儀礼で歌われる旅グエーナにも、大和での公務を拝命してから、公務を済ませて無事に沖縄に帰った祝いをするまでの一連のできことが描かれている。

『南島歌謡大成I 沖縄篇上』クエーナ¹⁴³番には、首里城へのぼり国王に拝謁する場面を、「五月が／ゆかる日に／しゅしたりめ／うすばから／おともたん／うしちりて／いちゅかきぬ／樋川御門に／いぐましわ／百浦添／うかきぶせ／我王の聖前／うすばもーち／千ぬうに拝／拝みあーち／お暇召しようち／お肝ぶくい／黄金お酌／しでゆあーち（五月の良き日に、旅へ出かけるお方は供の者を引き連れて樋川御門に賑やかにやつてきて、首里城本殿で國をお治めになつてゐる我が王様のお側へいらつしやつて、国王に旅立ちの暇乞いをすると国王から祝福の酌を頂戴した）」と描いてゐる。また、大和での勤めを無事に果たし帰国すると、「糸かきぬ／樋川御門／百浦添／王ぬ聖前／お側もーち／しゅりたりが／拝でめる／首里公事／あたるよう／ちゅらしまち／王の聖前／お肝誇くい（旅から帰つてきたお方が樋川御門に賑やかにやつてきて首里城本殿で國をお治めになつてゐる我が王様のお側へいらつしやつて、拝命した公務を立派に済ませて來たことの報告をすると王様はお喜びになつた）」と、首里城で国王に再び謁見して、大和での公務を無事に終えたことを報告するさまが描かれている。

琉歌では、「旅に行くときや帰つたときに拝謁しよう」「奉公をすませて九月に拝謁しよう」と出発前又は帰国後に国王に拝謁することが歌われる。

首里天加那志もゝとわれちやうわれ 旅の行戻り拝ですでら

（南苑八景・689・玉城王子）

〔首里の国王様、百年までいらつしゃつてください。旅の行きも戻りも拝謁いたしましょう。〕

首里きやなしみやたり済ち九月や かれよしのみおんちゆ拝ですれら
〔国王様への奉公をすませて九月はお喜びのお顔を拝謁しましよう。〕

（古今琉歌集・1619・具志堅里親雲上）

(5) 無事を願う

旅人を見送る者の立場から、「嘉例吉の願いをする」「海上が平穏である願いをする」「順風に乗つてください」「心安々と行つてきてほしい」「心からの願いをする」と、旅が無事であることを祈願する（このころ）が述べられる。

① 嘉例吉

縁起のことや、めでたいことを「嘉例吉」と言う。「嘉例吉の願いをする」「嘉例吉の歌を土産にする」「嘉例吉を袖に包んで喜んで行つていらっしゃい」と、旅人を見送る側の立場でめでたい旅であるようにと願う。

うちまねく扇子に御名残やふくて 御嘉例吉おねがひ揃てしやべら（琉球大歌集・120）

〔招く扇に名残を含んで、めでたい航海をするお願ひを揃つていたしましよう。〕

名に立る大和御登りや下り おかれよしめしやいるおねかひしやへら（古今琉歌集・1003・小禄按司朝恒）

〔評判の高い大和へのお上りや下りはめでたい旅をなさるお願ひをいたしましよう。〕

次の歌では「嘉例吉の歌とみやけしやひる（めでたい歌を土産にするのです）」と、見送る者の意思が述べられている。「嘉例吉の歌」を旅人に贈る」と「めでたい旅をしてほしい」という見送る者の（ゝゝゝ）を表現する。

里や明日ちふねのゝみやけしやへか 嘉例吉の歌とみやけしやひる（古今琉歌集・1172）

〔恋人は明日出船だ、何を土産にしましようか。嘉例吉の歌を土産としてさしあげるのです。〕

次の歌では「袖に嘉例吉を包んで」と歌われている。「嘉例吉（幸運）」を身に添えて旅をしてほしいと願うもので、これも「めでたい旅をしてほしい」という見送る者の（ゝゝゝ）を表現しているだろう。

出立るそてにかれよしはつゝて 旅のいきもとりほこていまうれ（古今琉歌集・1558・護得久朝置）
〔旅立つ袖に旅の幸運を包んで、旅の行きも戻りも喜びながらいらつしやい。〕

② 糸の上

「糸の上」は海上が平穏なさまを絹布を張ったさまに喻えたもので、船が絹布の上を滑るように航行してほしいとの願いを込めた表現である。「糸」を「絹糸」とし、船が真っ直ぐ進むようにとの願いを込めたものとする説もあるが、本来は絹布のイメージであつただろう。

宮古のトーガニ「布の上の旅さいか 糸の上の旅さいか 風しづか 波しづか 今日ときやん」（田島利三郎『宮古島の歌』^{十七}68番）や、八重山のユンタ「ぬぬぬういからかりゆし いちゅぬういからかりゆし かいじょうう

だやか いちろうへいあん」（『南島歌謡大成IV 八重山篇』 ユンタ72番）のように、宮古や八重山の歌謡には「糸の上」が「布の上」と対句で用いられている。「風しづか 波しづか」や「かいじょううだやか」と穏やかな海上のさまが描かれ、航海安全を願う。この「布の上・糸の上」は波や風が穏やかな海上のさまを歌つたものであり、琉歌の「糸の上」も穏やかな海上を絹布を張つたさまにたとえたものであろう。

「我々の願いは旅の行き来が絹布の上を滑るようであることだ」「糸柳を活けて祈願するので旅の行き来は絹布の上を滑るようだ」「オモトと柳を活けて虎の絵を掛けたので絹布の上を滑るようだ」と海上が平穏で航行が滞りなく進むことを願う。

親かなしはしめ我々のねかへも 御登りや下りいとの上から （古今琉歌集・1004）

「親御様始め我々の願いも、お上りや下りは絹布の上を滑るように走ることです。」

次の歌で歌われている「糸柳」は、柳の枝が根元に垂れていることから、元にかえる、無事に旅を済ませて帰つてくるという願いをこめたものである。¹⁻⁸

いとやなきいけてわか会釀しゆもの 旅のいきもとりいとの上から （古今琉歌集・1164）

「糸柳を活けて私が祈願するので旅の行きも戻りも絹布の上を滑るように走る。」

次の歌の「うむどう葉」は「おもと（万年青）」のことで、音が「御元」に通じることから、柳と同じく旅に出

た者が無事に元に帰つてくるようにとの願いを込めたものである。

うむどう葉どう柳床に虎かきて 嘉例吉の里前糸の上から (古謡秘曲の研究・20)

「オモトの葉と柳を活けて床の間に虎の絵を掛けたので、めでたい旅をなさるお方は絹布の上を滑るように走る。」

③ 風を頼む

次の歌では「沖に出れば順風を頼む」と、航行中は風を頼りにすることが歌われている。一句目の「沖」は臨海寺のことで通称沖の寺と呼ばれていた。三重城へと通じる長堤の途中にあり、旅に出る人を見送る場所である。沖の寺の近くまでは兄弟たちに見送られ、そこから先は風が頼りとなる。

沖の側までや思弟きや部つれて 渡中おしちれはかせとたのむ (古今琉歌集・1325)

〔沖の寺のそばまでは兄弟たちと一緒に行き、沖合いに出ると風を頼みにする。〕

④ 船頭を頼む

次の歌では「真艤のてたばうれ御船の船頭」と船頭に真艤に乗つて行つてくださいと願う表現になつてている。沖に出れば船頭にたよるしかない。無事に航行できるかどうかは、船頭の航海技術にかかっている。「真艤に乗る(艤の真ん中に乗る)」とは、楫を左右にきることなくまつすぐな状態に保つことであり、船がまつすぐ航行することを意味するのだろう。

渡中押出れば船まゝでもの 真艤のてたばうれ御船の船頭 (南苑八景・693)
〔沖に出ると船頭の腕次第である。真艤に乗つてください、船の船頭よ。〕

⑤ 心からの願いをする

旅の安全を願うのを「肝の願（心からの願い）をする」と歌つたもので、「兄弟揃つて心からの願いはしますが、旅先でも願つてください」「兄弟揃つて心からの願いをするので、旅先でも願つてください」「めでたい旅に急いでいらっしゃい、心からの願いをしてお待ちしましょう」と歌われている。

思弟きや部揃てねかひやしゆゝれとも 与所しちも里前願てたはうれ (古今琉歌集・1335)

〔兄弟揃つて心からの願いはしますが、旅先でも愛しい人よ、願つてください。〕

おめときやべそろて肝の願しやべむ よそしちも里前願てたばうれ (琉歌全集・1880)

〔兄弟揃つて心からの願いをいたします。旅先でも愛しい人よ、願つてください。〕

嘉例吉の御旅いそきむちいまうれ きもの願しちゆて御待しやへら (古今琉歌集・1002・小禄按司朝恒)
〔めでたい御旅は急いで行つていらつしゃい。心からの願いをしてお待ちいたしましょう。〕

⑥ 神仏に祈る

次の歌では「神仏揃つて見守つてください」と神仏に対し旅人の無事を祈る（ハコロ）が描かれている。作者は尚穆王となっているが、尚穆王が船旅をしたという記録がないことから、「美御前加那志御旅」は、①国王の陸路の旅、②国王の命を受けた旅、の二つが考えられる。

神仏そるて見守様ちたはうれ 今般美御前加那志御旅やこと （天理本琉歌集・274・尚穆王御歌）

〔神仏揃つて見守つてください。この度は国王様の御旅でありますから。〕

⑦ 心安らかにと願う

「糸柳を活けて祈願するので心安らかに行つていらつしゃい」と、航行中の旅人の心が安らかであることを願い、旅の安全を願う。

糸柳いけてわか会釈しゆもの こゝろやすやすといまふちいまふれ （歌道要法・29）

〔糸柳を活けて私が礼を尽くして祈願いたしますから心やすらかに行つて帰つていらつしゃい。〕

⑧ 嬉しいことばかりであつてほしい

次の歌では「嬉しいことばかりをお土産になさつてください」と、旅の間中嬉しいことばかりであることを願う。旅が嬉しいことばかりであることなどを願うことで、無事であることや旅の目的が無事に果たされることを願うもので

あろう。

今年御登りやいつよりもまさて うれしことはかり美つとめしやうり (古今琉歌集・1645)

〔今年のお上りはいつよりも勝つて嬉しいことばかりをお土産になさいませ。〕

(6) 手紙をください

旅人から便りが来ることを願う (ハジハシ) が見送る者の立場から歌われる。「便の数毎に手紙をください」「大和に着いたらすぐに手紙をください」「着いたら手紙をください」「帰帆の時には手紙を先に下さい」と、残る者の立場で手紙を乞う切実な思いが述べられる。この手紙は、めでたい旅をしたことや無事に着いたことを知らせる手紙であり、帰帆を知らせる手紙である。

滞在中の場面を描いた歌にも「今宵着ちやる御状はいぢやいちの御状が 大和いめ着ちよてお肝誇り (今日着いたお便りはどういつたお便りか。大和に着いてお喜びになつておる手紙だ。)」(『踊合』35番) と手紙を受け取つたことや、「主の前御状をがで読開くときや 我胴やれば我胴るつてどみやびる (旦那様のお手紙を拝見して読み開くときは、我が身は我が身かとつねつてみるほどです)」(『南苑八景』712番) と手紙を受け取て喜ぶさまが描かれている。

遠く離れた旅人の消息を知りたいと願うのは、旅人の無事を願つからであり、出発や滞在中の場面で、手紙を乞う (ハジハシ) が描かれる。

かれよしの御状や拝で拝みばしや 便のかざごとに持たちたばうれ (琉歌全集・1649)

〔めでたい旅のお手紙は拝見してもまた拝見したい。便の数ごとに持たせてください。〕

大和いめ着かは誇い声の御状や 肝急じ召そち持たち給ばれ (踊合・33)

〔大和にお着きになつたら、喜びの声のお手紙をお急ぎになつて持たせて下さい。〕

次の歌では上句で「着いたら御状もたちたはうれ (手紙を持たせてください)」と旅に出る人に対して手紙を乞い、下句では手紙をいただいたら「心安らかに帰りをお待ちましょう」と待つ者の態度が示されている。

いまひつかは里前御状もたちたはうれ 心やすやすとおまちしやへら (古今琉歌集・1171)

〔お着きになつたら愛しい人よ、お手紙を持たせてください。心穏やかにお帰りをお待ちいたしましょう。〕

次の歌では「公務をすつかり済ませて御帰帆の時は手紙を先に持たせて下さい」と帰国を知らせる手紙を乞うことが描かれている。

公事美ら済まち御帰藩の時は 御状は先立てて持たち給ばれ (踊合・66)

〔公務を立派に済ませて御帰帆の時は、手紙を先に持たせて下さい。〕

(7) 帰りを願う

出発の場面で旅人の帰りを願う歌には、「招く扇は再び廻り来て縁を結ぶものだ」「来年の今月は帰帆の祝いだ」「盆が元にかえるように帰つてきてほしい」「帰つてきたら朝夕会いましょう」「公務を済ませて帰つてきてほしい」「錦を着て帰つてきてほしい」と、旅人が帰つてくることを願う《二重城》が表現される。

① 招く扇

「三重城に登つて招く扇は再び廻り来て縁をつなぐよすがとなるものだ」と「扇」が再び会うことを約束するものだと表現されている。

三重城にのぼてうちまねくあをぎ 又もめぐり来てむすぶ御縁 (琉球大歌集・63)

〔三重城に登つて招く扇は再び廻り来て〕縁をつなぐよすがとなるものです。〕

「扇」は風を起こす道具であることから、見送りの際に、出帆する船への順風を願つて招かれたのであろう。だがそればかりでなく、「扇（あふぎ）」は「会う（あふ）」に通じることから、再会を願つて用いられた。上り口説の一節に「またも廻り逢ふ御縁とて 招く扇やみえ城」とあり、再会を約束するものとして「招く扇」が用いられている。『天理本琉歌集』には、「」はの葉の团扇形見とて置て 廻て又持む御縁仰か (蒲葵の团扇を形見として取つて置いて、廻つて再びお会いする御縁を仰ぐ)」(410番)と、「再びお会いする御縁を仰ぐ」ものとして团扇が詠まれている。

② 帰帆の祝い

「今年の今月は上京して来年の今月は帰帆の祝いだ」と旅が順調にすすみ、旅人が無事に帰ることを願う。

「とし今月やお登りよめしやうち やねの今月や帰帆お祝」（琉歌全集・1665）

〔今年の今月は〕上京なされて、来年の今月は〔〕帰帆のお祝いだ。〕

結婚の祝い歌に「今年今月やお根引のお祝 ゃんの今月や産子お祝（今年の今月は婚礼のお祝で、来年の今月は赤ちゃんが生まれたお祝いだ）」（『琉歌全集』874番）がある。今年結婚し来年の同じ頃に出産するということは、順調な結婚生活をあらわすだろう。この歌同様、旅の場合も順調な旅と、来年無事に帰帆することが願われている。

③ 盂が元にかえる

「めでたい酌が元にかえるように行つて帰つていらっしゃい」と、旅人の帰りを願う（このころ）が表現されている。祝いの盃が人々の間をめぐり再び元の場所にかえるように、帰つてきて欲しいと願う。

かれよしの酌のくり返ち元に かへるごとお旅いまうちいまうれ（琉歌全集・1650・小橋川朝昇）
〔めでたい酒盃が繰り返し元に帰るように旅に行つて帰つていらっしゃい。〕

④ 公務を済ませて帰る

「公務を済ませて嬉しいことを聞く菊の頃に喜んで帰つていらつしゃい」「公務を立派に済ませて急いで帰つていらつしゃい」と無事に任務を終えて帰つてくることを願う。

みやたり事すまち嬉しへときくの 花のさくころにほこていまふれ (歌道要法・33)

「公務を済ませて嬉しいことを聞くといふ菊の花の咲く頃に喜んで帰つていらつしゃい。」

朝夕肝の願御願しち居らは 公事美らすまち急じいもれ (踊合・65)

「朝夕心からのお願いをしているので、公務を立派に済ませて急いで帰つていらつしゃい。」

次の歌では「お願いを済ませて帰つていらつしゃい」と歌われている。那覇港の水路の一つである「大和口」に入る船は大和から帰つてくる船である。「御願こと」を『琉歌全集』は、「廢藩置県の命に接して、琉球藩の存続を請願したことではなかつたかと思う。」としている。だとすると、「御願こと」は琉球王府の命を受けたものであり、この歌も公務が無事に遂行されることを願う歌となる。

御願こと済ちはたひかちいまうれ やまと口いはは美御迎しやへら (古今琉歌集・1569・護得久朝置)
「お願い事を済ませて旗をなびかせていらつしゃい。大和口に船が入つたらお迎えいたしましょ。」

⑤ 錦を着て帰る

「錦を着ていらつしやるお願ひをしましよう」「公務を済ませて錦を重ねて帰つていらつしやい」「錦を重ねて嬉しいことを聞く菊の頃に再びお会いしましよう」と、無事に任務を果たし、錦を着て帰ることを願う歌がある。前項の「公務を済ませて帰る」ことを願う歌と近いが、無事に公務を済ませるだけでなく、その後の出世を願う意が含まれているだろう。

明てまたあけるあきのくれなるの 錦きちいまいる御願しやへら

(古今琉歌集・1056・久手堅筑親雲上)

〔再来年の秋に紅の錦を着ていらつしやるお願ひをいたしましょう。〕

みやだいり事すまち錦うち重ね 袖よふる里にほこていまうれ

(琉歌全集・1738・真謝親雲上孝覽)

〔王府への奉公を済ませて錦を重ねて袖を振つて故郷へ喜んで帰つていらつしやい。〕

にしきうちかさねうれしこと菊の はなさきゆるこにまたもをかま

(古今琉歌集・1014・浦添王子朝熹)

〔錦を重ねて嬉しいことを聞くという菊の花が咲く頃に再びお会いしましよう。〕

にしきうち重ねいまひる日と我身や 朝夕肝のくわん御待ちしやへる

(古今琉歌集・1555・松山尚順)

〔錦を重ねて帰つていらつしやる日を私は朝夕心からの願いをしてお待ちしているのです。〕

かれよしよたて我が会釈しゆもの 早くきゝいまうれ大和たしき (古今琉歌集・1576・護得久朝置)
「めでたい歌を歌つて私が祈願するので、早く着て帰つてきてください、大和の錦を。」

⑥ 帰つたら朝夕会う

「帰つたら朝夕お会いしましよう」と出発の際に旅人の帰郷を歌うことで、旅人の帰りを待つ（ヒヒシキ）を表現する。船は「潮浮る御船（海の水に浮く船）」「縄とゆる御船（縄を取つた船）」と間もなく出発する状態にあり、もう引き止めが出来ない。そこで「帰つたら朝夕お会いしましよう」と旅人の帰りを願う。

琉球大学附属図書館蔵『古歌中風集』に収録されている歌では、四句目が「またん拝ま（再びお会いしましよう）」となっている。「朝夕拝ま」の場合は朝も夕も常に「会う」ことを願うものであり、「またん拝ま」よりも再会を願う（ヒヒシキ）が強められているだろう。

潮浮る御船のよしちよしまれめ いまおち参り里前朝夕拝ま (琉歌百控・367)

〔海に浮いている船が引き止めて引き止められようか。行つていらつしやい愛しい人よ、帰つていらしたら朝夕お会いしましよう。〕

縄とゆる御船のよしちよしまれめ いまうちまうれ里前あさゆをかま (古今琉歌集・1170)

〔縄を解いた船が引き止めて引き止められようか。行つていらつしやい愛しい人よ、帰つていらしたら朝夕お会いしましよう。〕

次の歌は下句は先の歌と同じであるが、上句が「三年御旅てしん時の間どやゆる（三年の旅もあつという間だ）」となつてゐる。

三年御旅てしん時の間どやゆる いもちもれ里前朝夕拝ま （踊合・8）

〔三年の旅といふのもわずかの間である。行つていらつしやい愛しい人よ、帰つていらしたら朝夕お会いしましょう。〕

(8) 帰りを待つ

「三年待つのは長い」「どうやつて待ちましようか」「手さじの長さでは長い、ガジマルの髭の長さくらい」と旅人の帰りを待ちかねる〈こころ〉が歌われる。この「帰りを待つ」のグループは、旅の別れの辛さや待つ辛さを詠んだ羈旅歌に近接している。

次の歌は、三年待つのは長いが行きたいと願つても自由にならない北京への旅なので、待ちましよう、と帰りを待つ者の〈こころ〉が表現される。

三年かさねよす待なかいさあすか 願て自由ならぬ北京御旅 （古今疏歌集・1333）

〔三年の月日を重ねるのは待ち遠しいが、願つても自由に行くことができない北京への旅である。〕

次の歌では「朝夕」飯を上げ馴れていた」「朝夕お側にいた」とあり、抒情主体が旅に出る人と日常慣れ親しんできた妻であることが示されている。そして、「どうしてお待ちしましようか」と待つ者の〈いこゝろ〉が歌われる。

朝おほん夜ほん我おしやけならて いきやしんちよ御旅御待しやへか (古今琉歌集・1166)

〔朝御飯、夕御飯を私が差し上げてきましたのに、どのようにして三年の旅を御待ちしましようか。〕

朝夕さもおそば拌みなれそめて 里や旅しめていきやす待ちゆが (琉歌全集・668)

〔朝も夕も、御側で拌見して馴れ親しんできたお方に旅をさせて、どのようにして御待ちしましようか。〕

次の歌は「手さじの長さでは長い、ガジマルの髭の長さくらぶ」と帰りを待つ期間を手さじやガジマルの長さにたとえたものである。

手さじの長さやなげ長さ 庭に植ゑてるがじまるのひげの長さ (琉歌全集・1324)

〔手中の長さでもまだ長い。庭に植わっているガジマルの髭の長さくらいだ。〕

宮古のトーガニに「布長んあてながさ／手巾長んどきながさ／庭に植ゑたる／がつぱな樹の／葉のなげ」(『宮古島の歌』66番)がある。『宮古島の歌』にはこの歌詞に「旅の」と注記があり、旅の儀礼で歌われた歌であることが分かる。トーガニでは「葉の長さ(くらぶに短く)」とあるが、琉歌では「髭の長さ」となつていて、帰りを待

つ時間が長いことが強調される。『琉歌全集』は「手中の長さも長いけれども、それよりも長いのは、庭のがじまの氣根の長さだ。実にみごとである。」とガジマル木の氣根の見事さを歌つたものと解釈している。しかし、トーガニと同じく旅人が帰る日を待つ時間の長さを（あるいは航路の距離に喻えたものか）、布や手さじ、がじまるの葉といった物の長さに置き換え、早く帰る日が来てほしいとの（←こう）を歌つたものであつただろう。

第二章 航行

船が航行している場面は、(1)順風が吹いている、(2)平穏な航行だ、(3)虎のように速く走る、(4)船の走るさまが美しい、(5)神による守護、(6)海上の平穏を願う、(7)明日到着する、と描かれている。

(1) 順風が吹いている

出発の時と同じように、船の航行に順風は欠かせない。航行の場面でも、(1)美風が吹いている、(2)順風が平穏な航行をもたらす、と航行中に順風が吹いていることが歌われている。

① 美風が吹く

「これほどのすばらしい順風は今回が初めてだ」「航海安全の願いが叶うというように順風が吹いている」「順風、これが航海安全をもたらすのだ」と順風が吹いているさまを歌う。

次の歌は「先を見れば唐／大和」と目的地に向けて船が航行中であることを示し、「後を見れば順風だ」と航行

中の理想的な状況を描いている。下句は「これほどのすばらしい順風は今回が初めてだ」と今までにないほどのすばらしい順風であることが歌われている。

『歌道要法琉歌集』では「唐土」と「大和」が並べて記されており、旅の目的地によつて「唐土」と「大和」を入れ替えて歌われたことが分かる。

先みれば唐土 大和 あと見れば美風 これほどの御風今度はしめ (歌道要法・25)

〔先を見れば唐／大和、後を見れば順風だ。これ程のすばらしい順風は今回が初めてだ。〕

次の歌は先の歌とほぼ同じであるが、二句目の「美風」が「浮縄（沖縄）」となつてゐる。

『南苑八景』(699番)、『琉歌全集』(1675番)、『琉球王朝古謡秘曲の研究』に収録されている歌が同じく「浮縄（沖縄）」となつてゐる。

さきみれば唐土 大和 あとみれば浮縄 これほどの美風今度はしめ (古今琉歌集・1328)

〔先を見れば唐、後を見れば沖縄だ。これほどのすばらしい順風は今回が初めてだ。〕

次の歌でも順風が吹いているさまが描かれている。「そなうするうちにめでたい旅のお願いが叶う」と吹いてゐるもので、順風は航海安全を約束するものとして吹いてゐるのである。

いつれかれよしのおねかひ叶はとて かれよしの美風まともおしゆさ (古今琉歌集・976)

〔そういうするうちにめでたい旅のお願いが叶つていてめでたい風が真艤から吹いているよ。〕

② 順風が平穏な航行をもたらす

航行する海上が穏やかなさまを「糸の上」「糸を延える」「糸を掛ける」のように、絹布を広げ渡した状態にたとえ表現することがある(次項「(2)平穏な航行」参照)。次の歌では「順風こそが絹布だ」と穏やかな海上の状態を作り出すのは順風であるとする。

あかと渡海なかゑいとのかけられめ 真艤押かせとにやいとさらめ (古今琉歌集・1322)

〔あんに遠い海に絹布がかけられようか。真艤から吹く風こそが絹布なのです。〕

絹糸掛けらしちん絹糸の掛けらりみ 真艤押す風どな絹糸さだみ (踊合・14)

〔絹布をかけようとしても絹布がかけられようか。真艤から吹く風こそが絹布なのです。〕

次の歌では一句目が「大和から浮縄」となつていて、大和からの復路が詠まれている。

大和から浮縄糸のかけられめ まとも押風どにや糸さらめ (南苑八景・700)

〔大和から沖縄へ絹布がかけられようか。真艤から吹く風こそが絹布なのです。〕

(2) 平穩な航行

平穩な航行のさまは、①絹布の上を滑るように船が行き来する、②京都から沖縄に橋を架けてその上から来る、
③波は船に従い順風が吹く、④波が静かだ、と表現される。

① 糸の上

海上が穏やかで航行がしやすい状態を「糸の上」「糸を延える」「糸を掛け」ると表現し、その上を船が行き来す
ると歌われる。

「旅の行き戻りは絹布の上を滑るようだ」「ひたすら絹布の上を滑るように行つたり来たりしている」と、絹布
を敷き延べたような穏やかな波の上を航海することが理想的な航行の様子として歌われている。

かれよしきかれよしき 旅のいきもどりいとのうへから (古今琉歌集・784)

「めでたい、めでたい。旅の行き戻りは絹布の上を滑るように走る。」

かれよしおねにかれよしはのすて 旅のいきもどり糸の上から (琉球大歌集・91)

「めでたい船にめでたさを乗せて唐への行き戻りは絹布の上を滑るように走る。」

かれよしの御船にかれよしは乗て 唐土行戻り糸の上から (南苑八景・703)

「めでたい船にめでたさを乗せて唐への行き戻りは絹布の上を滑るように走る。」

嘉例吉やいつも嘉例吉とめしやいる たゞ糸の上からむきやいきちやい (古今琉歌集・1320)

「めでたい船はいつもめでたい旅をするものだ。ひたすら綿布の上を滑るように行つたり来たりしている。」

次の歌では「船の舳先には波の花を咲かせて艤に筋／虹を引く」と船の航行のさまが描かれ、旅の行き来は「糸の上（穏やかな海の上）」からだと歌われている。

上句の「船の舳先には波の花を咲かせて艤に筋／虹を引く」は船が走る理想的な状態を描いたもので、『古今琉歌集』(1324番)では下句を「かれよしの御船のはるか清さ」と、航行を讃美する表現となつていて

おもて花さかちともにすぢひかち 旅の行戻り糸の上から (南苑八景・697)

「船の舳先に花を咲かせて艤に筋／虹を引いて、旅の行き戻りは綿布の上を滑るように走る。」

次の歌では穏やかな海上を船が行き来するさまを「綿布を敷き延べて唐（大和）を行つたり来たりしている」と表現している。

かれよしたうかれよしたう 糸はへて唐土いちやりきちやり (天理本琉歌集・872)

「めでたいことだよ。めでたいことだよ。綿布を敷き延べて滑るように唐を行つたり来たりしている。」

嘉例吉たう嘉例吉たう いとはゑて大和行いつきやい (古今琉歌集・785)

〔めでたいことだよ。めでたいことだよ。絹布を敷き延べて滑るように大和を行つたり来たりしている。〕

次の歌では穏やかな海上を航行するさまが「絹布を掛けてその上から」と歌われている。

大和から沖縄絹糸かけて置ちよて ○○^{クマ}の里主はうりが上から (踊合・13)

〔大和から沖縄へ絹布をかけておいて、この家の里主はその上からだ。〕

② 橋を架ける

次の歌では、海上が穏やかで航行しやすいさまを「橋の上」を行くようにと表現している。「京都から首里に黄金の橋を架けて首里の国王様はその上からだ」と穏やかな航行を願う。

京都から首里黄金橋かけて 首里天加那志おれが上から (古謡秘曲の研究・5)

〔京都から首里に黄金の橋を架けて首里の国王様はその上からいらつしやる。〕

③ 波は船に従い順風が吹く

「嘉礼吉の御船」「按司添ひが御船」「殿かなし御船」が沖に出ると「波は船に従い風は真舡から吹く」と航行に理想的な状態が描かれている。

かれよしのおねのとなかおしでれは なみやおしそえてかぜやまとも (屋嘉比工工四・23)

〔嘉例吉の御船が沖に出ると船は波を従えて風は真艤から吹いてる。〕

按 司そひが御船の海中おし出れば 波は押しそへて風やまとも (琉球戯曲集・10)

〔国王様の御船が沖に出ると船は波を従えて風は真艤から吹いてる。〕

次の歌は『大島筆記』に収録されているもので、「薩摩の衆の帰国を祝ふての曲也」との注がある。「殿かなしおね」は「薩摩の殿様の御船」のことであろう。

殿かなしおねの渡中おしてれは 波やおしそへて風やまとも (大島筆記・26)

〔殿様のお船が沖に出ると船は波を従えて風は真艤から吹いてる。〕

④ 波が静かだ

次の歌では「旅の道が広く開かれ船を走らせてみれば波もしつかだ」と海上が穏やかなさまが示される。

「そよいもことし旅のみちひろて ふねはらち見れば波もしつか (歌道要法・19)

〔去年よりも今年は旅の道が広くなつて、船を走らせてみれば波も静かである。〕

「道が広い」とは進路を妨げるものが無く行き来がしやすい状態をいうのであろう。「聞得大君のおすしおひかりに 旅のみちひろくむきやいきちやい」(歌道要法・34)と行き来しやすいさまや、「道広き御代に生まれたるしるし 露の玉拾て貰きやり遊ば」(百控・281)、「道広き御代や四方のお万人も 歌うたて遊で嬉しやはこり」(百控・282)と、御代を言祝ぐ歌で用いられている。

(3) 虎の走り

船が速く走るさまを「虎のかけはしにむしやいひきちやひ (虎のように走つて行つたり来たり)」と表現する。

「虎は千里往つて千里還る」といわれ、一日の間に千里の道を行つて帰つてくることが出来るときれた。琉歌では船足の速いことを「虎の走り」「虎の駆け走り」と歌われている。

青柳におもといとの縁むすて 虎のかけはしにむしやひきちやひ (古今琉歌集・892)

〔青柳とオモトに糸の縁を結んで虎のように速く走つて行つたり来たりする。〕

おもと葉と柳床に虎掛けて 虎の駆け足に往じやい来ちやい (踊合・44)

〔万年青と柳を活け床に虎の絵を掛けて、虎のような駆け足で行つたり来たりする。〕

次の歌では「糸柳」と「ふいぐの」とあれば」と「柳」と「ふいぐ」が用いられている。この歌は山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』の旅御前風節の歌詞として掲載されているものであり、他の歌集には見られない。「ふいぐ」は語意がよく分からぬが、轄のことではないだろうか。^{二千} 轄は鍛冶が火をおこすのに用いる道具で、空気を

送るためにピストンを往復させる。「ふいぐ」が轆のことであれば、轆がいつたりきたりするように船が無事に行き来てほしいとの願いをこめたものであろう。

糸柳」とにふいぐのことあれば 虎の駆け走りに往ぢやい来ぢやい (古譜秘曲の研究・1)

〔糸柳のようで、轆のようであるので虎が駆け走るように行つたり来たりする。〕

(4) 船の走るさまが美しい

「船が走るのが美しい」「走るのが速くて美しい」と船の航行のさまを讃美したものがある。「舳先に花を咲かせ艤に筋(虹)をひいて走る様が美しい」「船が沖に出ると波は船に従い走るのが美しい」「里主の船は走るのが速くて走る様は美しい」と船の航行を「美しい」と讃美することで理想的な状態が実現することを願つ。

次の歌は「嘉例吉の御船」「按司そひが御船」が走るさまは、舳先に波の花を咲かせ艤に筋(虹)を引いて美しいと歌われている。

面て花咲ち艤に虹引ち 嘉例吉の御船の走か清さ (琉歌百控・387)

〔船の舳先に花を咲かせて艤に虹を引いてめでたい船が走るのが美しい。〕

おもてはなさかちともにすちひかち かれよしの御船のはるか清さ (古今琉歌集・1324)

〔船の舳先に花を咲かせて艤に筋を引いてめでたい船が走るのが美しい。〕

おもてはなさかちともにすじひかち 按司そひが御船の走るがきよらさ (戯曲集・11)
〔船の舳先に花を咲かせて艤に筋を引いて按司添の船が走るのが美しい。〕

次の歌も船の航行を讃美したものである。「嘉例吉の御船」「按司添いの御船」が沖に出ると「船は波を従えて走るのが美しい」と描かれている。

嘉例吉の御船の渡中おしちれば なみもおしそひてはるかきよらさ (歌道要法・20)
〔めでたい船が沖に出ると、船は波も従えて走るのが美しい。〕

按司そひが御船の渡中おしちれば 波はおしそひてはるがきよらさ (琉球大歌集・85)
〔国王様の御船が沖に出ると、船は波も従えて走るのが美しい。〕

次の歌では「絹布の上を滑るように走るのが美しい」と描かれている。

嘉例吉の御船にかりゆさ小乗せて 只絹糸の上から走るが美らさ (踊合・15)

〔めでたい船にめでたさを乗せて、ひたすら絹布の上を滑るように走るのが美しい。〕

次の歌では「里主ぬう船やなふいん走ゆさ (里主の御船はもつと走るよ)」と船の航行能力 (距離か、速さか)

の素晴らしさを描いた上で、「走いん走い清さ（走りも美しい）」と船の航行を讃美している。

あんちえんぐわはゆし走ゆんでいどう云うるい 里主ぬう船やなふいん走ゆさ、走いん走い清さ糸の上から

（古謡秘曲の研究・10）

「あの程度に走つているのを走ると言うのか。里主のお船はもつと走るよ。走りも美しい、綿布の上を走るよ。」

次の歌では「はるがきよらさ」のような航行を讃美する言葉は無いが、「はるがまたも（走るのがさらばに）」と船の走るさまをとりあげている。これも船の航行を讃美した歌であろう。

かれよしおねのとなかおしじられは はるがまたも （屋嘉比工工四・19）

〔嘉例吉の御船が沖に出ると走るのがさらばに。〕

(5) 神による守護

航行中の船を守護するものとして、①姉妹神、②聞得大君、③神、が描かれる。旅人は姉妹の靈力によって守られ、船には聞得大君の靈力の風が吹き、航行が無事であるのは聞得大君や神のお蔭であると歌われる。

① 姉妹神

女性は男性よりも靈的に優位にあり、姉妹は旅に出る兄弟を守護するものと考えられた。いわゆる「をなり神信

仰」である。「姉妹の靈力は守り神だ」「船の高艤にとまつてゐる白鳥は姉妹の靈力だ」「姉妹からの手拭いは守り神だ」と航行中の船は姉妹の靈力に守護されていることが歌われている。

次の歌では「思姉のみさじ」が目的地である大和へ導くものと描かれている。姉妹からの「みさじ（手拭い）」には姉妹の靈力が込められており、旅人を守護する守り神となる。

思姉のみさじ守神だいもの 引き廻ちたばうれ大和までも （琉歌全集・1641）

〔姉妹の手拭いは守り神だ。導いてください、大和までも。〕

次の歌では姉妹の靈力は守り神であり、船の真艤に乗つてくださいと歌われている。

姉妹が御靈力守る神だも まとも乗て給れ姉妹御靈力 （踊合・22）

〔姉妹の靈力は守り神という。真艤に乗つてください、姉妹の靈力よ。〕

次の歌では、姉妹の靈力が白鳥となり、船の高艤にとまつていることが描かれる。

お船のたかともにしろとやがみちをん 白とややあらぬ思ないおすじ （琉球大歌集・139）

〔御船の高艤に白鳥がとまつてゐる。白鳥ではない、姉妹の靈力だ。〕

船の高ともに坐ちゆる白鳥つぐわ 白鳥やあらぬをなり神がなし (琉歌全集・289)

〔船の高艤に座つてゐる白鳥は白鳥ではない、姉妹神様だ。〕

② 聞得大君

聞得大君は航行の安全をもたらすものとして祈願の対象ともされた。^{二十}「帆が包む風は聞得大君の靈驗ある風だ」「聞得大君の靈驗ある風を下さい」「聞得大君の靈力で旅がしやすい」と聞得大君の力によつて航行が無事に進むさまが描かれる。

次の歌では、聞得大君の力は「御筋美風」「御靈力風」のように「風」と表現されている。

一の帆の帆中吹つつも御風 聞得大君の御筋美風 (琉歌百控・84)

〔一の帆の帆いっぱいに吹き包む風は、聞得大君の靈力の風である。〕

聞得大君前御靈力風給れ 御上りは真南に御下り真北 (踊台・4)

〔聞得大君様の靈驗ある風を下さい、お上りには真南の風を、お下りには真北の風を。〕

次の歌では聞得大君の靈力が「光」と表現されている。「旅の道が広くなる」とは進路を妨げるものがなく航行が容易な状態を言つのである。聞得大君の靈力によつて障害がなく航行が容易となる。

聞得大君のおすしおひかりに 旅のみちひろくむきやいきちやい （歌道要法・34）

〔聞得大君の御靈光のお蔭で、旅の道が広く開かれ何の障害もなく行つたり来たりしている。〕

③ 神

「無事に航行する」とができるのは神様の御靈光のお蔭だ」と神の御靈光に船が守られていることが描かれる。

なだやすく渡るかれよしのお船や お神お光のおかげさらめ （琉歌全集・1708）

〔平穩無事に渡つていくめでたいお船は神様の御靈光のお蔭だ。〕

(6) 海上の平穩を願う

次の歌では「七島なだやしくあらち給れ」と歌われている。「七島」はトカラ列島の諸島が散在する海域で、黒潮が流れるために年間を通じて波があり、古くから海の難所として知られる所である。その危険な七島灘を航行する頃、旅人の家では夜通し祈願をして航行が平穩無事であるようにと祈る。

今宵の夜ながたはお願しち居らは 七島なだやしくあらち給ばれ （踊合・18）

〔今宵は夜通しお願いをしてるので七島灘を平穩無事にして下さい。〕

(7) 明日到着する

「一晩中お願いしているので明日の吉日は山川港だ」と、目的地への到着を「近い未来の」ととして描いている。

今宵の夜ながたは御願しち居らは 明日の佳かる日は山川港 (踊合・30)

〔今宵は夜通しお願いしているので、明日の良い日には山川港に着く。〕

第三章 到 着

到着の場面では、(1)目的地へ早く着いた、(2)目的地が近い、(3)（目的地に）到着した様子が見えるようだ、と歌われている。天候に恵まれ順調な航海をした結果、目的地に着くのが早いのであり、近く感じられるのである。(1)と(2)は旅人の立場で、(3)は故郷に残り旅人の無事を願う者の立場で歌われている。

(1) 目的地に早く着いた

理想的な旅は、漂着や遭難をすることなく目的地に早く到着することであろう。「三日で着いた」「三日の祝いをする頃には山川港だ」「虎のような走りをして着いた」「祝いの盃が巡る間に着いた」「まどろむ間に着いた」「たちまち着いた」と目的地に到着するまでの時間が短いことが強調される。

① 三日で着いた

「那覇から出て三日だ、いつの間に着いたのか」「三日の日の祝いをする頃には山川港だ」と三日で旅の目的地に着いたことが描かれる。航海を歌ったクエーナ（34番）でも「那覇港／親泊／しゆがけたさ／はいけたさ／出ち三日／走ち四日／やうらでやり／いそげてやり／唐土の／漢土の／親港／親泊／おしつけて／かけとめて（那覇の港から出発して、出て三日走らせて四日で唐の港に着けて）」と那覇港を出発してから三日（四日）で着いたと歌われている。

那覇からや出ちけふ三日となゆるいつの間につきやか虎の門口
那覇から山川みなと

（歌道要法・24）

〔那覇から船を出して今日で三日だ。いつの間に着いたのか、虎の門口（五虎門）に／山川の港に。〕

「虎の門口」と「山川みなと」は、いずれも那覇を出発した船が到着した場所を示している。『琉歌全集』は「虎の門口」を「虎の穴の入口、即ち出発した元の所」としているが、それだと那覇を出発してから三日目に再び那覇に帰つたことになってしまふ。往路の場合と同じく、復路の場合も「唐土から出き今日三日どなよる いつの間につきやが那覇の湊」（『南苑八景』720番）のように三日で着いたと表現される。「三日」は往復にかかる時間ではなく、往路又は復路のいざれかにかかる時間を表しているのであり、「虎の門口」は出発した元の所ではなく、目的地であると考えた方が良い。また、『琉球大歌集』（367番）には「虎の門や日付 木の下までも（虎の門はその日のうちに着いて木の下までも）」とある。「木の下」は福州にある停泊地である」とからすると、「虎の門口」は

福州への入口にある五虎門のことであろう。

旅人を送り出した家では旅人の安全を祈願して出発から三日目に「三日の日の祝い」が行われた。^{二十一}次の歌は、三日の日の祝いが行われる頃には目的地である山川港に到着していると歌つたもので、順調に航海が進んで無事に目的地に到着したことを描いている。

かれよしのお船やいとの上にはらち 三日の日のお祝山川港 (琉歌全集・1646)

「めでたいお船は綿布の上を走らせて三日目のお祝は山川港に着いている。」

② 虎のような走りをして着いた

「寅の日に船を出して虎の走りをして何時の間に着いたのか」「寅の方からの風に寅の日に船を出して虎のような走りをして着いた」と船が速く着いたことが歌われる。虎は一日に千里を駆けるとされた。そのため船が虎のように速く走ることを願つて「寅の日」に船を出す。「寅の方角の風」は北北東から吹く風であり、沖縄から中国福建へ向けて船出するには順風となる。

寅の日に出ち寅のはいしめて いつの間につきやが虎の門口 (南苑八景・70)

「寅の日に船を出して虎の走りをさせて何時の間に着いたのか虎の門口に。」

寅のはの風に寅の日に出ち 虎のはりしめて虎の門口 虎の門や日付木の下までも (琉球大歌集・367)

「寅の方角からの風に寅の日に船を出して、虎の走りをさせて虎の門口に着いた。虎の門はその日のうちだ、

木の下までも。」

寅のはのかせに寅の日に出ち 虎のはりしめて虎の門口 (古今琉歌集・1317)

〔寅の方からの風に寅の日に船を出して、虎の走りをさせて虎の門口に着いた。〕

③ 盂（お茶）が巡る間に着いた

目的地に到着するまでの時間が短いことを「祝いの盃が巡る間に着いた」「お茶を巡らせると着いた」と表現する。

本帆や帆もたち祝のさかつきの めぐる間につきやさ山川みなど (古今琉歌集・1330)

〔本帆と矢帆を靡かせて、祝いの盃が巡る間に着いたよ、山川港に。〕

ぶくぶくのお茶は旅の嘉例な物 立ててめぐらしは山川港 (踊合・28)

〔ぶくぶく茶は旅のめでたいものだ。お茶を立てて巡らせるうちに船は山川港に着いた。〕

ブクブク茶は「戦前は婦人たちの集まりや船出の祝いなどに盛んにおこなわれた」ものであり、踊合のために集まつた婦人たちに振る舞われたものであろう。

二十九

(4) まどろむ間に着いた

那覇港を出発してから目的地（山川港）に到着するまでの時間が短いことを「まどろんだだけだ、いつの間に着いたのか」と表現する。

那覇からや出ちまとるみとしゆたる いつの間にききやか山川港（天理本琉歌集・234）

「那覇から船を出して少しまどろんだだけだ。いつの間に着いたのか、山川の港に。」

(5) たちまち着いた

次の歌では、早く目的地に到着したことが「うびらじに着ちやさ（たちまちに着いたよ）」と表現されている。

真艤押す風に真艤押さりやい うびらじに着ちやさ 山川港（踊合・17）

〔真艤から吹く風に真艤を押されて、たちまちに着いたよ、山川港に。〕

(2) 目的地が近い

航海は常に危険がつきまとうため航行の距離は短いことが望ましい。「船を走らせてみると近い所だ」と予想していたよりも目的地が近いことが描かれる。「近地だいもの」と目的地が近いことが強調されているが、船を走らせてみると近い所なのであり、航行にかかる時間が短かつたことを表現したものであろう。

うよそから見ればあひな渡海やすが 御船はらちみれば近地だいもの （南苑八景・704）

〔おおまかに見るとあんなに大きな海だが御船を走らせてみると近い所だ。〕

(3) 到着した様子が見えるようだ

故郷に残る者の立場で「唐に着いた嬉しい顔を拝見するようだ」「山川港に着いた嬉しいような顔を拝見するようだ」「山川港に入つて喜んでいらつしやるのを拝見するようだ」と無事に目的地に着いている様子が見えるようだと描かれる。出発してから目的地まで「すぐに着く」と時間的に間をおかずして到着したことが示されている。

慶良間からたをとすぐに乗りめしやうち 嬉しかを里よおかもことさ （天理本琉歌集・282）

〔慶良間から唐へすぐにお着きになつて嬉しい顔をした愛しい人を拝見するようだ。〕

山川の湊すぐにのいめしやち 嬉しかをつきの拝む」とさ （南苑八景・705）

〔山川の港にすぐにお着きになつて、嬉しそうなお顔を拝見するようだ。〕

山川御宿り直ぐに入り召そち 御誇らさ召せし拝む如に （踊合・32）

〔山川の立派な港にすぐにお入りになつてお喜びになつている姿を拝見するようだ。〕

第四章 滞 在

旅先に滞在中の場面を描いた歌には、(1)我が家に吉報を伝えてほしい、(2)旅人の帰りを待つ、(3)旅先での無事を願う、(4)旅人から手紙を受け取る、(5)公務の遂行を願う、(6)旅人の花が咲いている、と描かれている。(1)は旅人の立場で、(2)から(6)は旅人を送り出し帰りを待つ者の立場で歌われている。

(1) 吉報を伝えてほしい

旅人の立場で「沖縄に先にいらつしやつて我が家に吉報を伝えてほしい」と歌われている。

いつれ嘉例よしや浮縄先いまふち 嬉しか宿にかたてたはふれ (歌道要法・30)

〔そういうするうちにめでたく沖縄へ先にいらつしやつて吉報を私の家に伝えて下さい。〕

今帰仁朝敷の「浮縄先いかはうれしおとつれや カれよしの宿にかたてきかさ」(『古今琉歌集』1554番)の歌はこの歌の返歌として詠まれたものであろう。

(2) 帰りを待つ

旅人の帰りを待つ者の立場で、「帰る月を数える」「月日が早く過ぎて帰つて来る日になつてほしい」「帰つていらした嬉しそうな顔を見たい」「手紙を受け取るよりも帰つていらしたらもつと嬉しい」「嬉しい手紙を待つ」「北

風が吹いている」「夢も面影も頻繁になる」「帰つたら一緒に願を解こう」と、帰りを待ち望む〈こころ〉が表現される。また、旅人の帰りを待つて糸を績み衣を作ることが描かれる。

① 帰る月日を数える

旅に出た人が帰る日を今か今かと待つて いるさまが「恋人が帰る月を数えるためにいしなごを取つた」「慰めに取つたいしなごは恋人が帰る月を数える算になつた」「これまで月を数えて待ち、今からは日を数えてお待ちする」と帰りを待つ者の立場で描かれる。

慰みにとたる 磯子やあらぬ 里がいまい月のさんどたる 玉のいしなごや 里がいまい月のさんどたる (南苑八景・714)

〔慰めに取つたいしなごではない(玉のいしなごは)、あの方が帰つていらつしやる月を数えているのだ。〕

慰ぐさみに取たる 石なぐどやしが 里前いめ月の算になたさ (踊合・79)

〔慰めのために取つたいしなごであるが、里前が帰つていらつしやる月を数える算になつたよ。〕

こんなかいの御待月よての御待 なまから御待日よて御待 (琉球大歌集・368)

〔これまで月を数えてお待ちして、今からは日を数えてお待ちする。〕

② 月日が早く過ぎてほしい

「心配する日が早く過ぎて帰つてくるのをお待ちしよう」「帰りはいつかと待ち兼ねるのも時の間だ。明けて五月には急いでいらつしゃい」「九月は待ち遠しいから月日を引き寄せてください」と月日が早く過ぎて帰つてくる日になつてほしいと帰りを待つ者の立場で歌われる。

おみづくそ月日はやく押過て　寅のあきはしりおまちしやへら　（古今琉歌集・105）

〔心配する月日が早く過ぎ去つて、虎の走りのように早く走る船に乗つてお帰りになるのをお待ちしましょう。〕

いつかいつかしゆすも時の間どやゆる　明けて五月や急ぎいまうれ　（琉歌全集・1609）

〔いつだらう、いつだらうと思うのも一時のことだ。明けて五月には急いで帰つていらつしゃい。〕

九月が月は待ち長さあもの　引ち寄せて給ぼり御月御太陽　（踊合・70）

〔九月の月は待ち遠しいので、引き寄せてください、お月さまお日さまを。〕

③ 嬉しい顔を側で見たい

旅人の帰りを待つ者の立場で、「帰つてくる月が早く来て嬉しそうな顔を見たい」と歌われている。

明で九十月や肝いそぎめしやうき　嬉しかを御側持みぼしやの　（南苑八景・715）

〔年が明けて九、十月は大いに急ぎなさつて、嬉しそうな顔を御側で拝見したいものだ。〕

④ 帰つていらしたらもつと嬉しい

次の歌では「手紙を拝見して嬉しいが帰つていらしたらもつと嬉しい」と帰りを待ち望む〈こころ〉が表現されている。旅人が無事であることは帰りを待つ者にとって重要なことであり、その吉報をもたらす手紙は嬉しいものである（④手紙を受け取るの項参照）。その嬉しい手紙よりも、旅人本人が無事に帰つてくることが嬉しいのである。

御状拝でんしかん嬉りさあむの 里前もちもらはなふいん嬉りさ (踊合・68)

〔お手紙を拝見しただけでこんなに嬉しいのだから、里前が帰つていらつしやつたらもつと嬉しい。〕

⑤ 嬉しい便りを待つ

菊の花が咲く秋は北風が吹き始め、旅人からの便りをのせた船が来る季節である。「嬉しい事を聞く菊の月を待つていてる」「嬉しいことを聞く菊の花に音信が匂い立つていてる」と旅人からの便りを待つ〈こころ〉を「菊の月を待つ」と表現し、旅人からの便りを期待する〈こころ〉を「吹く風に菊の花の匂いがたつていてる」と表現している。

青柳のいとにかれよしよむすて うれしこときくの月とまちゆる (古今琉歌集・890)

〔青柳の糸に嘉例吉を結んで、嬉しいことを聞く、菊の月を待つていてるのです。〕

最早押風も嬉しい」と菊の花に音信の匂立さ（南苑八景・599）

〔もうすでに吹いている風もお帰りになるという嬉しい便りを聞くという、菊の花に音信が匂い立っている。〕

⑥ 北風が吹いている

北に行つた旅人にとって北風は順風であり、北風が吹くことは旅人が帰つてくることを期待させる。「北風が吹き続いているので王様の船を待つてているのだ」と帰りを待ち望む者の〈こころ〉が描かれる。

北かせの真北ふきつめてをれば 按司添前てたの御船とまちゆる（古今琉歌集・882）

「北風が真北から吹き続いているので、国王の乗つている船を待つてているのだ。」

⑦ 夢や面影が頻繁になる

旅人の帰りを待ち望む〈こころ〉が帰りを待つ者に夢や面影で旅人の姿を頻繁に見せる。「夢や面影を頻繁に見るのは恋人が帰る月が近くなつたのだ」と帰りを待ち望む〈こころ〉が歌われる。

里がいまい月の近くなてさらめ 夢も佛もしげくなどす
（南苑八景・725）

〔愛しい人が帰つていらつしやる月が近くなつたのだ、夢も面影も頻繁になつてているのは／なつてているよ。〕

⑧ 帰つたらお礼参りをしよう

帰りを待つ者の立場で「帰つたら一緒に御礼参りをしよう」と旅人が無事に帰つた時に行われる寺社へのお礼参りを描き、旅人の帰りを待つ（ここころ）が描かれる。旅に出ることが決まると吉日を選んで寺社に詣で旅の安全を祈願した。旅から帰るとその報告とお礼参りに再び寺社に詣でるのである。

弁の嶽小嶽願立ててい置ちゆてい 里前もちもらば連りてい解か （古謡秘曲の研究・24）

〔弁の嶽に旅の安全の祈願をして、夫が帰つたら一緒に御礼参りをしよう。〕

⑨ 衣を作る

旅人の帰りを待ちながら糸を績み、衣を作っていることが描かれている。次の歌では「糸芭蕉の内皮を晒してお迎えの衣を作ろう」と歌われている。

園芋の中子真白引晒ち 旅にいまへる里か胴衣袴 （琉歌百控・188）

〔庭の糸芭蕉の内皮を真つ白に引き晒して、旅先にいらっしゃるお方の胴衣と袴に仕立てよう。〕

あたい芋の中ぐ真白引ち晒ち 里が御迎えの御衣ゆしらに （踊合・72）

〔庭の糸芭蕉の内皮を真つ白に引き晒して、旅に出ているお方のお迎えの衣にしましよう。〕

旅人の帰着の場面を詠んだ歌に「七読みと二十請綴掛けて置ちよて横糸生むる間や御帰藩召そち」（『踊合』73番）がある。これは「横糸を績んでいる間に御帰帆なさつた」と早い帰りを喜ぶ歌であるが、ここでも帰りを待つ女性の仕事として糸を績むことが描かれている。

(3) 無事を願う

旅人の帰りを待つ立場で、「心から願うことが限りがない」「姉さんたちは月々の祈願、両親は日々の願いをする」と歌われている。

① 心からの願い

旅人の無事を願う〈こころ〉が「心から願うことが限りがない」と歌われている。

百氣いきのべる里や旅しめて 朝夕肝の願算やしらぬ （南苑八景・724）

「私の気を満たしてくれる大事なあの方を旅にやつて、朝夕心から願うことが限りがない。」

百氣いきのひふる里や旅やらち わ身や肝の願さんやしらん （天理本琉歌集・856）

「私の気を満たしてくれる大事なあの方を旅にやつて、私は心から願うことが限りがない。」

② 月々日々の願い

旅人の無事を願う 〈いいろ〉 が「姉さんたちは揃つて月々の祈願をし、両親は日々の祈願をする」と歌われている。

思姉たそろて月月のお願 あやと親がなし日日のお願 (琉歌全集・1642)

〔姉妹達はそろつて月々のお願いを、母と父は日々のお願いをする。〕

(4) 手紙を受け取る

旅人の帰りを待つ者の立場で、「明日は手紙を拝見するでしょう」「今日着いた手紙は大和に着いて喜んでいる手紙だ」「今日着いた手紙は九月に帰帆なさるという手紙だ」「手紙を読むときは嬉しくて夢のようだ」と、旅先からの手紙を受け取ること、「手紙を読むときは嬉しくて夢のようだ」「手紙を持たせてくれて嬉しい」「手紙をもらつて嬉しいのだからお帰りになつたらもっと嬉しいだろう」と、旅先からの便りをもらつた歓びが歌われている。次の歌では、「明日は手紙を拝見する」と、手紙を受け取ることが近い未来のこととして描かれている。

今宵の夜ながたやお願して居らは 明日の佳かる日に御状は拝がで (踊合・34)

〔今日は夜通しお願いしているので、明日の良い日にはお手紙を拝見する。〕

次の歌では、今日届いた手紙は「大和に着いて喜んでいる」とや、「九月になると帰帆する」という手紙であ

る、と待つ者にとって嬉しい内容の手紙であることが歌われる。

今宵着ちやる御状はいぢやいぢの御状が 大和いめ着ちよてお肝誇り (踊合・35)

「今日着いたお手紙はどういつたお手紙か。大和に着いてお喜びになつてお手紙だ。」

今日着ちやる御状やいぢや言ぢの御状が 九月になりは御帰藩召せさ (踊合・69)

「今日着いたお手紙はどういつたお便りか。九月になつたら御帰帆になられるとのお手紙だ。」

次の歌では手紙を受け取り読むときはうれしくて夢のようだと歌われる。「我胴やれば我胴る」は直訳すると「我が身は我が身か」で、あまりの嬉しさで夢のようだ、の意。

主の前御状をがで読開くときや 我胴やれば我胴るつでどみやびる (南苑八景・712)

〔旦]那様のお手紙を拝見して読み開くときは、我が身は我が身かとつねつてみるほどです。」

次の歌では「おほくらしや (嬉しい)」「果報しさみ (有難い)ことだ」と手紙をもらつた嬉しさが表現される。

おほくらしや里前御状もたち賜ち 心安々と御待しやびら (南苑八景・711)

〔嬉しいことだ、愛しい人が手紙を持たせてくださいて。心穏やかにお帰りをお待ちいたしましよう。」

果報しさみ里前御状持たち給ばち 心安々と拝がでしでて (踊合・67)

「ありがたいことだ、愛しい人が手紙を持たせて下さつて。心穏やかに拝見しました。」

(5) 公務の遂行

旅先で公務を行う旅人の心が穏やかであるようにと願う。旅先での仕事が旅人の心を煩わせるものではなく穏やかにするものであつてほしいというもので、旅人の心の状態が平穏なものであることを願うとともに、無事に務めをはたすことを願うものである。

大和いめ着ちよて執い召せる公事 心安々とあらち給ばれ (踊合・36)

「大和に着いてお執りになる公務は心穏やかにあらせてください。」

(6) 旅人の花

旅人の庭に咲く花が美しく咲いていることや茉莉花の花が、帰りを待つ者に不在である旅人のことを思わせる。

「愛しい人の花は唐（大和）に向かつて咲いている」「障子を開けて見ると菊が咲いているのが美しい」「茉莉花は旅に出ているお方のものだ」と歌われている。

里か庭はなやものもいやぬはかり 唐土 大和うちむかて笑てさきゆさ (古今琉歌集・1338)

「愛しい人の庭の花はいまにもものを言いそうだ。唐／大和に向かつて笑つて咲いているよ。」

障子戸突き開けて見れば 庭の白菊の咲ちよる美らさ (踊合・47)

〔障子戸を開けて見ると庭の白菊が咲いているのが美しい。〕

てんさぐの花はうえぐんそりうえもの むいくわ花小花里がうえもの (踊合・48)

〔鳳仙花の花は首里のお嬢様のもので、茉莉花の花は旅に出ているお方のものだ。〕

第五章 帰 着

旅を終えて帰着する場面では、(1)船が那覇の港に入つてくるさま、(2)通堂を通るさま、(3)那覇の港に三日で着いたと早い到着を歌つたもの、(4)旅人の帰りを喜ぶものがある。

(1) 那覇の港に入る

理想的な帰港の様を、「明け雲と共に慶良間に並んで朝日を拝んで那覇の港に着いた」「石砲をとどろかせ引船を従えて那覇の港に着いた」と描いている。

朝日を拝んで港に入る、引船を後に従えて港に入ると、いずれも理想的な帰港のさまが描かれている。

慶良間 美崎 はいならて あかるてた拝て那覇のみなど (歌道要法・32)

〔明け雲と一緒に慶良間島／美崎に併走し、昇る太陽を拝見して那覇の港に着いた。〕

慶良間はいならで石火矢ごめかき 引船やあとに那覇の港 (南苑八景・71)

〔慶良間に併走して石砲をとどろかせ、引船を後ろに従えて那覇の港に着いた。〕

(2) 通堂を通る

旅人の帰着のさまを「大事な我が子が御袖を振るよ」と描いている。袖を振つて通堂を通るということとは、無事に勤めを終えて誇らしく帰つてきたさまを表現していく、理想的な帰郷を描いている。

通道大道は誰が御袖振ゆが 玉黄金生子御袖振ゆさ (踊合・80)

〔通堂の大通りは誰が御袖を振つて通るだろうか。大事な我が子が御袖を振るよ。〕

(3) 那覇の港に早く着いた

「唐から出て三日で那覇の港に着いた」「一走りで那覇の港に着いた」「横糸を續む間に帰帆なさつた」と、旅先から帰着するまでの時間が短いことが表現される。

唐土から出き今日三日どなよる いつの間につきやが那覇の湊 (南苑八景・720)

〔唐から船を出して今日で三日だ。いつの間に着いたのか、那覇の港に。〕

いつかたらともて御待しゆるうちに 御船やひとはらし那覇の湊 (歌道要法・31)

「いつだらうかと思つてお待ちするうちに、船は一走りで那覇の港に入つてきた。」

七読みと二十請締掛けて置ちよて 横糸生むる間や御帰藩召そち (踊合・73)

〔七読みと二十請の締を掛けておいて横糸を續む間に御帰帆になられた。〕

(4) 帰りを喜ぶ

旅人の帰りを待つ者の〈へいりゆう〉が、「こんなに早く帰つていらつしやるとは夢にも見ない」 「里主が御帰帆だから簾を巻き上げなさい」 「お礼参りをする時は夢のようだ」と表現されている。

いないまいでいきや夢やちやうん見だん 御願引合にいないまうちやさ (南苑八景・722)

「こんなに早く帰つていらつしやるとは夢でさえも見ない。お願ひがかなつて神の引き合わせで早く帰つていらつしやつたよ。」

嘉例吉の御状とわい待ひをたる いないまふちいまひす夢も見たぬ (古今琉歌集・1661・金武朝芳)

「めでたいお便りを私は待つていたのだ。こんなに早くいらしていらつしやるのは夢にも見ない。」

次の歌では、「里主が御帰帆だから大庫理の簾を巻き上げなさい」と歌われている。「大庫理の簾を巻き上げる」と詠んだ歌には他に、「大庫理のすたり巻あけれわらへ よかほしにゆくゆる雪のふゆさ」(『古今琉歌集』

護得久朝常)、「大床理の簾上りは童きよら瘡の御神いませんしやうきやさ」(『疱瘡歌』4番)がある。世界報を支度する雪を見たり、きよら瘡の神を迎えるために「簾を巻き上げる」と歌われている。里主が帰帆することも、これらのめでたい出来事と同じく、喜ばしい出来事として描かれている。

大庫理の簾卷ちやぎりは童 ○○里主が御帰藩でもの (踊合・81)

〔大庫理の簾を巻き上げなさい、童よ。○○里主が御帰帆だから。〕

次の歌の「願ほどく」は、出発前に旅の安全を祈願した神々にその加護を感謝する結願のことである。無事に旅を終え、結願をする時には嬉しくて夢のようだと、旅人の帰りを喜ぶ〈いこう〉が表現される。

里前先立てて願ほどく時や 我胴やれば我胴ゑつてど見やべる (琉歌全集・1677)

〔夫を行かせて御礼まいりをする時は我が身は我が身かとつねつてみるのだ。〕

第六章 旅の祝い

旅に出ている人の家では、出帆の前、出帆の日、出帆から三日目など、旅の安全を祈願する儀礼が何度も行われた。琉歌に、(1)旅の無事を祈願して祝い遊ぶ、(2)船や旅人、宿、唐の皇帝など、旅に関わるものを持てます、(3)御

心配なさるなど旅人の親を思いやる、ことが描かれている。

(1) 嘉例吉の遊び

① 祈願をする

「柳とオモトを活けて祈願をしよう」「旅にいらっしゃるお方の祝いだから遊ぶのだ」と旅の祈願を行う」とが描かれる。

柳やオモトは旅人が無事に元の場所に帰つてくるようにとの願いをこめて活けられる植物である。その柳やオモトを活けて旅の祈願が行われる。

柳真立ておもと葉は活けて 嘉例吉の殿内御願さべら (踊合・45)

〔柳の梢を立てて万年青を活けておめでたい御屋敷のお願いをしましよう。〕

次の歌では旅の祝いをする」とが「旅にいらっしゃるお方のお祝いなので遊ぶのだ」と描かれている。

遊欲舎あてもまことに遊はれめ 旅にいまへる里か御祝やこと (琉歌百控・354)

〔遊びたくとも、ふだんはあそべない。旅にいらっしゃるお方のお祝いなので。〕

② 夜の明けるまで祝う

旅の祝いを「夜が明けて太陽が昇るまで」「夜が明けてもよい、昼頃まで」行うと歌われている。

嘉礼吉の遊び打晴てからや 夜の明て日の昇る迄も
(琉歌百控・582)

「めでたい御祝いの遊びがうち解けたからには夜が明けて日が昇るまでも遊ぼう。」

夜の明て日やあがらわんよたしや 巳午時迄でや 我手間さらめ
御祝しやびら (南苑八景・717)

「夜が明けて太陽が上つてもいい、昼ごろまでは私のかつてであるのだから。／お祝いしましよう。」

次の歌でも夜が明けるまで「嘉例吉の遊び」を行うことが描かれているが、それは「嘉例吉の遊び」が素晴らしい現を抜かしてしまったためだとする。恋歌で「月夜や月夜ともて明ける夜や知らぬ わらべ腕枕にやうちほれて」(『琉歌全集』199番)と歌われるが、その「わらべ腕枕」と同じように「嘉例吉の遊び」が素晴らしいものだと表現したものであろう。

月や月ともて明る夜もしらぬ かれよしの遊びにやうちほれて (南苑八景・719)

「月は月だと思つて夜が明けるのも知らない。めでたいお祝いの遊びにすつかり現を抜かしてしまつた。」

③ 床板が壊れるほど踊る

旅人の無事を祈願して行われる儀礼の中で、畳をあげ板を踏みならしながら円陣を組んで踊りが踊られる。「床板が割れても良い」は、「それくらい激しく祈願の踊りを踊ろう」と踊りに参加する人々の〈ところ〉を表現したものである。

此家の板床は崩りらわんゆたさ 里前もちもらは七分板嵌めら （踊合・64）

〔この家の板床は毀れても良い。里前がお帰りになつたら七分の厚い板を嵌めよう。〕

④ 祈願し足りない

「めでたい御屋敷にお願いを残して」と、旅の祝いを終えるのが名残惜しいという〈ところ〉が描かれる。『踊合』にはこの歌詞は「踊合」の最後に納めの歌として歌われるという。

遊び染め馴れて踊り染め馴れて 嘉例吉の殿内御願残して （踊合・83）

〔遊びも大いに遊んだ、踊りも大いに踊った。それでもおめでたい御屋敷にお願いをし残している〕

(2) 讀美

旅に関わるものと讀美することとで、めでたい旅であるようにと言祝ぐ。讀美されるものには、①船、②菩薩加那志、③旅人、④旅衆の家、④中国の皇帝、⑤御代、がある。

① 船

「めでたい船の手縄は紅で本帆は錦のようだ」 「百年幾たび旅をしても何の支障もない」と船を讃美する。

嘉礼吉の御船の手縄取て見ちやめ 手縄紅に本帆錦 (琉歌百控・583)
〔めでたい御船の手縄を取つて見たか。手縄は紅で本帆は錦のようだ。〕

恵みある御代にはききたる美おね ももといくたびもさひやなひさめ (琉球大歌集・180)

〔恵みのある御代に造船して浮かべた御船は百年幾たび旅をしても何の支障もない。〕

② 菩薩加那志

次の歌では、「菩薩様はじめ行く一行もめでたい」と船の菩薩と乗員を褒め讃えている。「菩薩加那志」は航海する船を守護する觀音菩薩のことであり、天妃（媽祖）のことである。船には菩薩を祀る場所があり、吉日を選んで菩薩の乗船儀礼が行われ、航行中も無事に目的地に着くように「菩薩」への祈願が絶えず行われた。^{二十六} その菩薩と乗員を褒め讃え、旅の安全を祈願する。

菩薩加那志はしめ嘉礼よしとめしやいる そろてまひる人数かれよさらめ (正樂本・32)
〔菩薩様を始め縁起がよくていらっしゃる。揃つていらっしゃる一行も縁起が良いことだ。〕

③ 旅人

旅に出る人を「旅をしても公務をしても素晴らしい」「公務で出世していくお方だ」「大和戻りの方の家中に入ると芳ばしい」と讃美する。

御旅しん美さみやだりしん美さ いきやる親加那志すだしめしやうちやら (南苑八景・707)

「旅をしても素晴らしい、公務をしても素晴らしい。どのような親御様がお生みになつたのだろうか。」

錦金欄はかしちから上る 公事から上る此家の里前 (踊合・58)

〔錦金欄はかせ木から上がつていく。公務で出世していくのはこの家のお方だ。〕

御門入りは香ばさ内入りは勝さて ○○里主の大和戻り (踊合・82)

〔御門に入ると芳しく、家の中にはいるといつそう匂いが増しているのは、○○様が大和戻りだからだ。〕

④ 旅の祝いの宿

旅に出る人がいる家では旅人の安全を祈願して儀礼が幾度となく行われた。「この屋敷の菊の枝は銀で幹は黄金だ」「此処のめでたさは他所は及びもつかないほどで幸運が着いている」「月日を増す」とに幸運も増す」と讃美されている。

此殿内内に菊ぬ花いきてい 枝見りば銀心や黄金 (古謡秘曲の研究・21)

〔この御屋敷の中に菊の花を活けて、枝を見れば銀で幹は黄金だ。〕

○○の嘉例吉に他所の及ばりみ 向かて行く先や果報ど着ちゆる (踊合・56)

〔此処のめでたさは他所は及びもつかない。向かつていく先は幸運があるのだ。〕

果報も着ちゆしがる着ちん着ち美らさ 月日増す毎に果報ど増さる (踊合・57)

〔幸運も着くものこそが着いて美しい。月日を増す毎に幸運も増すよ。〕

次の歌では「めでたい宿のお座敷に出て心は躍るばかりだ」と旅の祝いの座を言祝ぐ。

お祝日になればかれよしの宿の お座出ちて肝や躍るばかり (琉歌全集・1632)

〔御祝いの日になればめでたいことのある家の御座敷に出て心は躍るばかりだ。〕

⑤ 首里の果報

「やすやすと行き来ができるのも首里のお蔭だ」「すばらしい順風が吹いているのは首里の国王のお蔭だ」と、

海上が航行に適した状態であるのは首里のお蔭であるとする。

潮と風打合て安々と御旅 行戻りしゆすも首里の御加報 (琉歌百控・366)

〔潮と風が調和してやすやすと旅の行き来ができるのも、首里国王のお蔭である。〕

是程の御風今度始まゆし 首里天加那志御果報さだみ (踊合・20)

〔これ程のすばらしい順風が今度始まっているのは、首里の国王様のお蔭である。〕

⑥ 中国の皇帝

「唐の皇帝が沖縄を大切にしてくださる」と、中国の皇帝を讃美する。

唐土天きやなし浮縄おかなしやゝ かたらてもよそのたにやすらぬ
いく人としゆるよそやしらぬ (歌道要法・22)

〔唐の皇帝が沖縄を愛してくださることは語つてもよその人は本当には知らない／行く人が知るのだ、よその人は知らない。〕

(3) 家族を慰める

旅の安全を願つて行われた儀礼に集まつた人々が、旅人の親に対して「按司も下司もする旅」「首里の王様のお側」などで心配するなど慰める。

すだし親加那志どくおさうずめしやうな 按司下司もめしやいる御旅だいもの (南苑八景・706)

〔親愛なる親御様、あまりご心配なさらいでください。按司も下司もお出かけになる旅だから。〕

しだし親がなしどく御そじみそな 首里天加那志御側でのもの (踊合・40)

〔親愛なる親御様、あまりご心配なさらいでください。首里の王様のお側ですか。〕

- 一 『琉球国由来記』(外間守善 波照間永吉編 角川書店 一九九七年)「卷一 十月 渡唐衆御茶飯」の項。
- 二 山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』には「宴がすむと上司は退散するのであるが、荒武者の船夫達は、鉢巻に黒衣を着流して風旗をひるがえし、銅鑼を叩いて進貢使や筆者役人の家庭を訪ねまわり、旗をふりふり旅(「前風節を唱」)う、と記されている。この「旅」(「前風節」)が『琉球国由来記』にみられる「旅歌」のことであろう。

三 船や航海に関わる祭祀習俗やその中で歌われる歌謡については波照間永吉「沖縄の船・航海・祭祀—説話と歌謡から」(『東北学』vol.5 100年)に詳しい。

四 池宮正治「歌道要法」—解説と本文—(『琉球古典音楽 当流の研究』安富祖流絃声会記念誌編纂委員会 平成五年)

五 沖縄県立博物館蔵。清水明編『琉歌大成』(沖縄タイムス社 一九九五年)に対校本として採られている。「旅之時」として『山城正樂本琉歌集』は24首、『沖縄声曲集』は22首、『歌道要法琉歌集』『若樹文庫旧蔵本

琉歌集」は20首、『琉球俗謡集』は18首、収録している。また、波照間永吉氏の前掲論文には、『八重山歌節寄』の「赤馬節」に「旅之時同節」として旅を予祝する歌詞が収録されていることが報告されている。

七 『南苑八景』は、南苑八景、春、夏、秋、冬、雅頌、規戒、悔悟、哀傷、懷古、古跡、逍遙、謝、別離、羈旅、感慨、書懷、応題、分句、冠首、泡瘡歌、旅歌と、テーマによつて琉歌を細かく分類しており、その中に「旅歌」の部を設け、38首の琉歌を収録している。

八 嘉手苅千鶴子「琉球俗謡集—本文と解説」（『沖縄国際大学文学部紀要〔国文学編〕』三一号 一九九一年）

九 嘉手苅千鶴子「若樹文庫旧蔵本『琉歌集』—解説と翻刻」（『南島文化』二〇号 一九九八年）

十 池宮正治「沖縄声曲集—本文と解説」（『琉球大学法文学部紀要』三三二号）

十一 池宮正治氏は「雜踊り「花風」の背景」（『沖縄芸能文学論』昭和五七年 光文堂）の中で、この歌詞が節組による琉歌集で「稻まづん節」に分類されていること、「稻まづん節」が旅の予祝歌を歌つていたことから「本来はもつと旅行く男の平安を祈ると言つた内容だったのではないか」としている。

十二 この他に「ひちよゝ」（南苑八景・696番）、「ひちゅゝ」（琉球俗謡集・24番）の踊り字、「ひちゅよ」（古今琉歌集・1096番）の「よ」が入る場合があるが、衍字であろう。

十三 平成十八年度琉球大学大学院人文社会科学研究科国際言語文化専攻修士論文

十四 王氏は「木之下」の所在地について、『家譜史料』や中国側の史料『歴代宝案』『清代中琉関係档案選編』を丹念に照らし合わせた上で、「木之下は乾隆年間に多く使用されていた官田墩、または怡山院と官田墩の間に位置している停泊地であるということも想定できる」としている。

十五 一七六二年琉球から薩摩へ向かつた楷船が土佐藩に漂着した際に、藩の儒者戸部良熙が乗員に琉球について

尋問しまとめたもので、付録に琉歌が56首収録されている。

十六 阿波根朝松は『琉歌古語辞典』（那覇出版社一九八三年）の「いとの上から」の項で「引き延えられた糸のように真直ぐ滯り無く。」とし、絹布の意は異説として紹介している。島村幸一氏は「儀礼歌としての琉歌」『立正大学国語国文』第42号 立正大学国語国文学会（一〇〇四年）の中で、機にかけた縦糸を海上に、横糸を通す杼を船にたとえ、杼が絹糸の上を滑るように船が恙なく航行することを表現したものとの新たな説を出している。

十七 諸見菜々他三名の翻刻「田島利三郎『宮古島の歌』」（『宮古諸島における儀礼歌謡の収集・研究とデータベース化』研究代表者玉城政美 平成十六年度～十九年度科学研修費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書）。『琉歌全集』（5番）の語意に「枝葉が根本に垂れているので、そのように元に向かって早く帰るよう祈るよすがになる」とある。中国では「長安の都を旅立つ人を見送るとき、霸橋まで行き、やなぎのえだを折つてはなむけとした」との故事から、親しい人が旅に出る時に無事に帰ることを祈り、柳の枝を折り環の形に結んで贈つた。

十九 田島利三郎「宮古島の歌」の六十五番から六十八番の四首に「旅ノ」と記されている。

二十 『沖縄語辞典』によると輔は「フーチ (huuci) である。『与論方言辞典』には「ハイゴー」とあり、「ふい」」糸の語も用いられている。

二一 航海安全祈願の具体的な事例が、豊見山和行「航海守護神と海域—媽祖・觀音・聞得大君」（『越境するネットワーク』岩波書店 二〇〇一年）に報告されている。

二二 『琉歌全集』 1705 番 「語意」

一一三 閩江河口にある虎の形をした岩。

一一四 見里春は『踊台』の中で「本土や中国などに、公用や商用で旅する人がありますと、その家を旅衆（タビス）と称して、船出の日、船出から三日目、当人の誕生日、入船の日などのほか、お正月や五月五日、九月九日などの祝祭日には、親類、縁者、知人がその家に集まって、旅（航海）の安全を神仏や天地の靈に祈つたものです。」と書いている。

一一五 『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社 一九八三年）「ブクブク茶」の項。

一一六 真栄平房昭「近世琉球における航海と信仰―「旅」の儀礼を中心に―」『沖縄文化』77号（一九九三年 沖縄文化協会）